IBTA e-News 国際脳腫瘍ネットワーク 月刊ニュースレター

2023年7月号

目次　（項目をクリックすると記事本文にジャンプします）

【トップニュース】

- IDH野生型膠芽腫患者の長期生存に関する国際的研究結果

【治療関連ニュース】

- 女性乳癌が髄膜腫リスクを増加させるかどうかを問う研究
- サハラ以南のアフリカと小児がんの危機
- 脳神経外科手術中に脳腫瘍の分子識別を迅速に行う人工知能ツールを開発
- 原発性脳腫瘍患者の不安軽減にバーチャルリアリティを使用
- 患者コミュニティのニーズと嗜好が遠隔医療サービスの開発に含まれるようにするための枠組みをがん患者支援団体が提供
- ケニアでの脳腫瘍治療

【研究ニュース】

- 古代レトロウイルスの残骸が膠芽腫の攻撃性と回復力を引き起こす可能性？
- 黒色腫治療薬で希少脳腫瘍を90％縮小できると研究者が報告
- MDNA55と再発膠芽腫の臨床試験結果が発表
- 小児神経膠腫／星細胞腫におけるレナリドミド投与
- ONC201とパキサリシブを用いたびまん性正中神経膠腫の併用療法に関する研究
- 膠芽腫におけるシグレック-シアル酸軸の標的化

【企業ニュース】

- パキサリシブが脳転移の治療薬として米国食品医薬品局の優先審査制度指定を受ける：Kazia Therapeutics社発表
-

【イベント／学会ニュース(抜粋) 】

【トップニュース】

IDH野生型膠芽腫患者の長期生存に関する国際的研究結果

IDH 野生型膠芽腫と診断された人の長期生存について、欧州、米国、オーストラリアの 24 施設で行われた国際的な研究がHertler らによって European Journal of Cancer 誌に発表された。
欧州がん研究治療機関（EORTC）のETERNITY試験は、米国のBrain Tumor Funders CollaborativeとEORTC Brain Tumor Groupの支援を受けている。この研究には280人の患者のデータが含まれており、そのうち189人がIDH野生型腫瘍と診断された。患者のほぼ4分の3はMGMTプロモーターがメチル化された腫瘍であり、研究コホートの全生存期間中央値はほぼ10年であった。 この研究の主な所見の1つは、再発のない患者は1回以上の再発のある患者よりも生存期間が長いということであった。これは、集団レベルでは膠芽腫と診断された後の生存期間中央値が約12カ月であることと比較してのことである。ETERNITY試験は次のように結論づけた： 「がんが進行しないことは、膠芽腫の長期生存者における全生存の強力な予測因子である。再発のない患者は、しばしばMGMTプロモーターが非メチル化された膠芽腫であり、膠芽腫の異なるサブタイプを表している可能性がある」。
チューリッヒ大学病院神経科の教授でありETERNITY研究の主任研究者でもあるミヒャエル ウェラー医師は、次のように述べた： 「この研究結果は明らかなことように思われるかもしれませんが、この長期生存者という特殊なサブグループがあること、および、彼らの生存を理解することが治療に与える潜在的な意味を、腫瘍学界が完全に認識しているとは思えません」。 ETERNITY研究は、長期生存するIDH野生型膠芽腫患者に関してこれまでで最大の、一元的に審査され、厳密にまとめられた研究である。続きを読む（オープンアクセス論文）。

目次に戻る

【治療関連ニュース】

女性乳癌が髄膜腫リスクを増加させるかどうかを問う研究

JAMA Network Open誌に掲載された研究が、「乳癌女性患者における髄膜腫の生涯リスク、または髄膜腫女性患者における乳癌の生涯リスクは、女性集団全体と比較して高いのか？」という疑問に取り組んだ。 この疑問を検討した研究者らは、両方の疾患（髄膜腫と乳癌）を有する女性の患者歴を調べた研究群に注目し、「髄膜腫の女性患者では、一般女性集団と比較して乳癌の確率が10倍近く高い」ことを発見した。研究者らはまた、これらの結果は、髄膜腫の女性は乳癌のスクリーニングをより集中的に受けるべきことを示唆していると結論づけ、この関連性についてさらなる研究を行うべきであると示唆した。続きを読む

目次に戻る

サハラ以南のアフリカと小児がんの危機

今月のランセット・オンコロジー誌に掲載された論文は、サハラ以南のアフリカにおける小児がん患者の窮状を浮き彫りにしている。サハラ以南のアフリカでは、10万人以上の小児がん患者のうち90%が死亡している。高所得国では、がんにかかった子供の85%が生存している。この論文では、「小児がん治療の専門家の少なさ、不十分な小児医療施設、小児がんに対する一般的な意識の欠如」など、この大きな格差のさまざまな理由について論じている。診断の欠如や診断の遅れも、サハラ以南のアフリカにおける小児がん生存率の低さの一因である。この論文では、これらの問題に取り組み、小児がん患者の生存率を向上させる能力を構築するために、テキサス小児病院グローバル血液腫瘍学小児卓越プログラム（Texas Children’s Hospital Global Hematology Oncology Pediatric Excellence programme：“Global HOPE”）の活動を引用している。続きを読む（要入金/購読）

目次に戻る

脳神経外科手術中に脳腫瘍の分子識別を迅速に行う人工知能ツールを開発

CHARM（Cryosection Histopathology Assessment and Review Machine）と呼ばれる人工知能（AI）ツールが開発された。このツールは、脳神経外科医が、脳神経外科手術中にどの程度の組織を摘出するか、また手術中

に脳に直接投与する薬剤で患者を治療するかどうかについて、重要な決定を下すのに役立つ可能性がある。CHARMには臨床的検証と米国食品医薬品（FDA）の承認がまだ必要であるが、この技術革新はリアルタイムの精密腫瘍学の一歩を示すものと考えられている。Med誌に掲載された論文の著者らによると、CHARMは「凍結切片（凍結腫瘍組織）を用いて腫瘍のIDH変異の存在と2021年WHO分類基準に基づいたクラス分けを予測するとともに、星細胞腫の再クラス分けのための定量的証拠を提供した」。研究チームは、CHARM AIアプローチが他のがん種にも応用可能であり、リアルタイムの臨床判断支援を可能にすると結論づけている。詳細はこちらとこちら。

目次に戻る

原発性脳腫瘍患者の不安軽減にバーチャルリアリティを使用

米国国立衛生研究所（NIH）の一部である国立がん研究所（NCI）とAppliedVR社（「没入型治療」を専門とする企業）が共同で実施した第2相臨床試験（NCT04301089）の中間解析結果が、Journal of Neuro-Oncology誌に発表された。本試験は国立がん研究所のNeuro-Oncology Branch（NOB）がん研究センターが主導し、同センターのNatural History Study（NCT02851706）に積極的に登録された患者を対象としている。この新しいバーチャルリアリティ（VR）療法は、原発性脳腫瘍患者が直面する心理的問題を対象として設計されている。この研究では、VR機器にAppliedVR社のコンテンツがプリインストールされ、呼吸法、ガイド付きリラクゼーション、"瞬間逃避 "テクニックを含む41のシナリオが用意されている。中間解析の結果、患者はバーチャルリアリティを頻繁に使用し、高い満足度を示した。筆頭分担研究者である国立がん研究所のアマンダ・キング博士は、次のように述べた：　「バーチャルリアリティは、癌患者が耐えなければならないネガティブな面を軽減し、逃避を助け、対処を助けるポジティブな思考を経験させる可能性を持っています」。続きを読む

目次に戻る

患者コミュニティのニーズと嗜好が遠隔医療サービスの開発に含まれるようにするための枠組みをがん患者支援団体が提供

The Patient - Patient-Centered Outcomes Research誌に発表されたばかりのオープンアクセス論文では、がん患者支援団体が遠隔医療サービス開発のあらゆる段階において、他の利害関係者と対等なパートナーとして協力する方法について概説している。これには、がん医療における遠隔医療サービスを最適化するために、政府の政策立案、ガイドライン策定、患者ナビゲーション機会の提供などが含まれる。この論文（IBTA共同取締役のKathy Oliverが共著者）では、遠隔医療の利点と課題、遠隔医療のデザインと提供における医療従事者との協力の重要性、患者のフィードバックと経験に基づくより広範な遠隔医療環境の形成の側面が強調されている。続きを読む

目次に戻る

ケニアでの脳腫瘍治療

サブサハラ・アフリカ神経腫瘍学会（SNOSSA）の第5回年次総会ケニアのナイロビで7月に開催された。会議後のオンライン記事では、同総会の現地組織委員会委員長であり、ナイロビにあるアガ・カーン大学病院の脳神経外科コンサルタントであるBeverly Cheserem医師が、神経腫瘍治療の現地能力、神経腫瘍治療の実践に重要な技術の利用可能性、神経治療専門医の能力、現地での研究およびトレーニング、そして満たされていないニーズなど、ケニアにおける神経腫瘍治療におけるさまざまな問題について述べている。続きを読む

目次に戻る

【研究ニュース】

古代レトロウイルスの残骸が膠芽腫の攻撃性と回復力を引き起こす可能性？

Journal of Clinical Investigation誌に発表された研究によると、大昔にヒトのDNAに組み込まれた古代ウイルスの遺伝子が活性化されると膠芽腫の悪性度と治療抵抗性を高める可能性があるという。この研究の主任研究者であるアシッシュ　シャー博士は、ニュースリリースで次のように述べた：　「我々の研究室は、進化的に休眠状

態にある600万年前のレトロウイルスが脳腫瘍形成に寄与していることを発見しました」。患者サンプルの分析を通して、研究者たちは、HML-2（ヒト内在性レトロウイルス）遺伝子の活性化が、予後の悪化と、がん幹細胞（腫瘍の成長を促進すると信じられている細胞）のように振る舞うより悪性度の高い腫瘍と関連していることを発見した。これらの知見から、HML-2遺伝子は将来の治療法のユニークなターゲットになる可能性があると著者らは結論づけた。詳細はこちらとこちら。

目次に戻る

黒色腫治療薬で希少脳腫瘍を90％縮小できると研究者が報告

小規模臨床試験の結果がNew England Journal of Medicine誌に発表され、現在黒色腫の治療薬として承認されている2種類の薬剤が、初発の稀なタイプの脳腫瘍である乳頭状頭蓋咽頭腫（PCP）にも有効である可能性が示された。これは、乳頭状頭蓋咽頭腫と黒色腫がともにBRAF遺伝子変異を有することによるとされる。著者らは次のように述べている：「BRAF-MEK阻害剤であるベムラフェニブとコビメチニブの併用療法により、16人中15人が部分奏効以上を示しました」。この研究は、希少脳腫瘍の治療に既存の治療法を用いた精密医療を行う十分な根拠をもつ症例があることを強調している。続きを読む

目次に戻る

MDNA55と再発膠芽腫の臨床試験結果が発表

Neuro-Oncology誌に掲載された第2b相臨床試験の結果によると、再発膠芽腫（rGBM）患者において、インターロイキン4受容体遺伝子（IL4-R）を標的とし、対流強化薬剤送達法*により脳内に投与されたbizaxofusp（MDNA55としても知られる）と呼ばれる薬剤が、「腫瘍制御と有望な生存期間を示し、高用量で治療した場合、インターロイキン4受容体遺伝子発現レベルに関係なく再発膠芽腫患者に利益をもたらす可能性がある」という。 詳細はこちらとこちら。

＊訳注：薬剤を持続陽圧下に脳細胞間隙に局所注入し高濃度かつ広範囲に薬剤を分布させる薬剤投与法

目次に戻る

小児神経膠腫／星細胞腫におけるレナリドミド投与

Journal of Clinical Oncology誌に発表された第2相臨床試験の結果によると、レナリドミド（別名レブラミド）は毛様細胞性星細胞腫および視路神経膠腫の患者において臨床的に有効であり、忍容性があるようである。研究者らは次のように結論づけた：「低悪性度神経膠腫は慢性疾患として治療されることから、とりわけ急性毒性が限定的であり、アルキル化剤治療に伴う二次悪性腫瘍の既知のリスクもないラナリドミドは、この集団における治療の選択肢となり得る」。詳細はこちら

目次に戻る

ONC201とパキサリシブを用いたびまん性正中神経膠腫の併用療法に関する研究

ドパミン受容体とミトコンドリア酵素を標的とする薬剤であるONC201のびまん性正中線神経膠腫（DMG）の治療における作用機序と効果を検討した論文が、Cancer Research誌に掲載された。研究者らは、前臨床および臨床データを用いて、ONC201がミトコンドリア経路の主要タンパク質を分解することによりびまん性正中線神経膠腫細胞のエネルギー産生と代謝を阻害し、細胞死と腫瘍増殖の抑制につながることを発見した。研究者らは、ONC201に対するびまん性正中線神経膠腫細胞の反応に影響を及ぼすいくつかの遺伝的因子（TP53変異やPIK3CA変異など）を発見した後、ONC201とPI3K/Aktシグナルを阻害する別の薬剤であるパキサリシブとの併用試験を行い、ONC201の効果が増強されることを見出した。著者らは、これらの知見は、この併用療法を試験する進行中の第2相臨床試験（NCT05009992）を支持するエビデンスになるとしている。続きを読む（論文全文）。

目次に戻る

膠芽腫におけるシグレック-シアル酸軸の標的化

Science Translational Medicine誌に掲載された論文によると、研究者グループが、膠芽腫が免疫系からどのように逃れるかをよりよく理解するために、患者データ、マウスを用いた実験、ヒト腫瘍の組織サンプルをどのように用いたかが述べられている。研究者らは、膠芽腫細胞の表面にはシアル酸糖鎖と呼ばれる糖分子が多く存在し、免疫細胞の表面にあるシグレックと呼ばれるレセプターと結合することで、免疫系から身を隠すことができることを発見した。研究チームは、抗体や遺伝子ツールでシグレックをブロックすることで、免疫細胞が膠芽腫をより殺傷できるようになり、他の免疫細胞（T細胞など）を活性化して腫瘍を攻撃できるようになることを発見した。続きを読む

目次に戻る

【企業ニュース】

パキサリシブが脳転移の治療薬として米国食品医薬品局の優先審査制度指定を受ける：Kazia Therapeutics社発表

Kazia Therapeutics社は、パキサリシブが放射線療法との併用でPI3K経路変異を有する固形がんの脳転移に対する治療薬として、米国食品医薬品局（FDA）から優先審査制度指定を受けたと発表した。米国食品医薬品局の指定は、現在進行中の第1相臨床試験の中間解析から得られた有望な臨床データに基づいており、そこでは原発腫瘍からの脳転移を有する患者がパキサリシブを放射線療法と併用して投与されている。これらの臨床データは、神経腫瘍学会（SNO）と米国臨床腫瘍学会（ASCO）が共催した中枢神経系臨床試験と脳転移に関する2022年次会議で発表された。続きを読む（同社プレスリリース）。

目次に戻る

【イベント／学会ニュース(抜粋) 】　※患者向けイベントは省略　学会ニュースのみ抜粋

*COVID-19*の大流行後、私たちは徐々に対面式のイベントに戻りつつあります。しかし、登録や旅行計画を立てる前に、予定されているイベントの状況や対面式、ハイブリッド式、バーチャル式のいずれであるかについて、カンファレンス主催者に確認するようにしてください。

目次に戻る

2023年8月

2023米国神経腫瘍学会(SNO)/米国臨床腫瘍学会(ASCO)中枢神経系腫瘍会議　2023年8月10日-12日　米国　カリフォルニア州　サンフランシスコ

2023年9月

第18回欧州神経腫瘍学会大会(EANO2023)　2023年9月21日-24日　オランダ　ロッテルダム

2023年10月

第15回CONGO科学会議　2023年10月8日-10日　オーストラリア　シドニー
21世紀の脳転移管理　2023年10月20日　英国　ロンドン
第26回脳神経外科世界会議（WCN2023）　2023年10月15日-19日　カナダ　モントリオール
欧州臨床腫瘍学会（ESMO）大会2023　2023年10月20日-24日　スペイン　マドリッド
第19回アジア脳腫瘍学会年会(ASNO2023) 2023年10月27日-29日　インドネシア　バリ

2023年11月

欧州がんサミット2023　2023年11月15日-16日　ベルギー　ブリュッセル
第28回神経腫瘍学会大会、教育イベント（SNO2023）　2023年11月15日-19日　カナダ　バンクーバー

2023年12月

小児脳腫瘍ワークショップ-南アフリカ小児がん研究部ループ(SACCAG)/サブサハラ・アフリカ神経腫瘍学会

（SNOSSA）共催　2023年12月1日-2日　南アフリカ　ケープタウン

脳腫瘍患者やその擁護団体によるイベントまたは学術会議（バーチャルか対面かは問わず）を企画している方、ご存知の方、または上記イベントの変更にお気づきの方は、kathy@theibta.orgまで。イベントページに掲載可能。

IBTAウェブサイトの会議ページで、今後の学術会議やイベントの最新情報を確認のこと。

IBTA（国際脳腫瘍ネットワーク）について

国際脳腫瘍ネットワーク（The International Brain Tumour Alliance：IBTA）は2005年に設立されました。各国の脳腫瘍患者や介護者を代表する支援、提唱、情報グループのネットワークであり、脳腫瘍の分野で活躍する研究者、科学者、臨床医、医療関係者も参加しています。詳細は www.theibta.org をご覧ください。

ご意見をお聞かせください

IBTAコミュニティで共有したいニュースがあれば、ぜひお聞かせください。宛先：chair@theibta.org

月刊ニュースレターやホームページを通じて、ご購読者の皆様にできるだけ多くの情報を中継していく予定です。

メールニュース記事の選択は、編集者の裁量で行われます。

Copyright © 2020 The International Brain Tumour Alliance, All rights reserved.　無断複写・転載を禁じる。

（免責事項）国際脳腫瘍ネットワーク（IBTA）は、e-News（あるいはIBTA向け、またはIBTAに代わって作成されニュース内でリンクを提供しているすべての資料、報告書、文書、データ等）に掲載される情報が正確であるよう尽力しています。しかし、IBTAはe-News内の情報の不正確さや不備について一切の責任を負いません。また、その情報やリンク先のWebサイト情報など、第三者の情報の不正確さに起因する損失や損害についても一切の責任を負いません。このe-Newsに掲載される情報は教育のみを目的としたものであり、医療の代替となるものではなく、IBTAウェブサイト上の情報は、医療上のアドバイスや専門的サービスを提供することを意図したものではありません。医療や診察については、主治医にご相談ください。臨床試験のニュースを掲載することは、IBTAの特定の推奨を意味するものではありません。IBTA e-Newsからリンクされている他のウェブサイトは、IBTAは管理していません。したがって、その内容については一切責任を負いません。IBTAは読者の便宜のためにニュース内でリンクを提供しているものであり、リンク先のウェブサイトの情報、品質、安全性、妥当性を検証することはできません。IBTAのプロジェクトに企業が協賛することは、　IBTAが特定の治療法、治療レジメン、行動の推奨を意味するものではありません。（スポンサーの詳細については、スポンサーシップ・ポリシーをご覧ください）。e-Newsに掲載されている資料の見解や意見は、必ずしも国際脳腫瘍ネットワークのものではない場合があります。

翻訳：　伊藤　彰/JAMT（ジャムティ）翻訳チーム

監修：　夏目　敦至/名古屋大学未来社会創造機構・特任教授

河村病院・脳神経外科・部長